

感覚環境のモノサシをまちづくりに織り込むために

“いい感じ” の まちづくり

環境省

本冊子の趣旨と使い方

最近、部屋の窓を開けて春のそよ風を感じたり、近くの花壇で咲くきんもくせいの花においで季節を感じたり、小鳥の鳴き声をいとおしく感じたり、身近な環境の“いい感じ”に気づいたことがありますか。

このテキストでは、人の感覚という視点からまちを見つめ直すことにより、身近な環境の“いい感じ”を再発見したり、新しくつくり出していく手がかりを探ります。

● “いい感じ”って何！？（基本編）

身近な環境の“いい感じ”を実感する機会が少なくなっていますか？それは、わたしたちに問題があるのでしょうか？それとも、身近な環境に問題があるのでしょうか？

● “いい感じ”をみつけ、まちづくりにいかすには！？（実践編）

- ・意識してまちを歩き“いい感じ”を「みつける」
 - ・まちのみんなと“いい感じ”をわかちあい、目標を「つなげる」
 - ・まちの“いい感じ”を伝え、育てていくために「うごく」
- を紹介します。

● ほかのまちの“いい感じ”（事例集）

すでに各地で行われている“いい感じ”のまちづくりを紹介します。



目次

第1章 基本編

1 “いい感じ”が感覚環境のモノサシ

- 感覚は環境を知るセンサー 2
- 感覚環境のモノサシを使う 3

2 “いい感じ”をまちづくりにいかす

- 感覚環境のモノサシをまちづくりにいかす 4

第2章 実践編

1 みつける

- みつけてみよう 8
- 音 9
- かおり 13
- 光 17
- ねつ 21
- 複合化 25
- <コラム>五感の雨遊 29

2 つなげる

- つなげてみよう 30
- “いい感じ”のまちづくりワークショップ 30

3 うごく

- うごいてみよう 34
- “いい感じ”のまちづくりのヒント 36

第3章 事例集

第1章 基本編

本章では、「感覚環境」の基本的考え方とまちづくりとの関係について解説します。

“いい感じ”が感覚環境のモノサシ

理由はわからないけど、なんだかちょっと“いい感じ”。ふとした瞬間、あなたが感じた心地良さ。それを感覚環境のモノサシにします。

● 感覚は環境を知るセンサー

1：感覚

外界からの刺激を目・耳・鼻・口・肌などの感覚器官で感じる働きと、それによって起こる意識。視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚の五感の他に、温覚・冷覚・痛覚などがあります。

水辺をそぞろ歩いていると、水面にきらきらと反射する光、頬を優しくなでる風に爽やかな心地よさを感じ、また土手の草原に座れば、穏やかなせせらぎと太陽のぬくもり、そしてほのかに漂ってくる花のかおりにほっと人心地がつく。「きらきら反射する光」は目から、「せせらぎ」は耳から、「太陽のぬくもり」は肌で、「花のかおり」は鼻で感じています。このように、人がまわりを認識するときには、音、かおり、光、ぬつなどを体全体の様々な感覚¹で感じ取っていますが、私たちは普段、こうした様々な環境に取り巻かれながらも、とりたてて意識することもなく暮らしています。

もともと日本では、この身近な自然の変化を五感で感じ取り、自然の動きを予想する言い伝えをもっていました。例えば、夕焼けが見えると翌朝は晴れ、物の響き（鐘・川のせせらぎ等）がよく聞こえると雨など。しかし、自然がだ

んだんと失われていくと、人間は感覚でとらえることを忘れるようになってきました。

また、現代人は、過剰に感覚刺激を受けたり、感覚体験が乏しかったりするため、この環境を認識するセンサーに、低下や狂いが生じつつあるとも言われています。



写真1：水辺の風景

● 感覚環境のモノサシを使う

音・かおり・光・ねつといった感覚環境²は、私たちの暮らしに、どのような影響を与えているのでしょうか。

感覚環境は移ろい、変化しながら、その場、その時でしか味わえない空間を演出します。さらに、光や音、かおり、風などをきっかけとして、かけがえない思い出がふと蘇ってくることもあります。音・かおり・光・ねつから、季節や時代の移り変わり、そのまちの個性やそのまちならではの雰囲気といったものが思い起こされます。



写真2：季節の移ろいによる感覚環境の変化（水辺の夏（左）と秋（右）の様子）

普段何気なく感じているこれらの感覚が、より良く、より豊かに暮らしていくための重要な役割をもっていることに気づくこと、そして、“いい感じ”かどうか評価すること、感覚環境のモノサシをうまく使うことが大切です。このようなことを通し、より深く地域の魅力や特性を捉え、次世代へと伝えていく必要があります。



“いい感じ”



“いやな感じ”

2：感覚環境
モノ・カタチにならない人間の感覚により認識される環境。

2 “いい感じ”をまちづくりにいかす

どんなことを“いい感じ”と感じるかは、人によって違うものと思われています。確かにひとりひとりの感じ方は違いますが、みんなが“いい感じ”と思うこともあります。ひとりひとりが“いい感じ”をみつけたら、みんなに共通する感覚のモノサシをそれぞれのまちで見つけていくこと、そしてそれを広めていくことが大切です。

● 感覚環境のモノサシをまちづくりにいかす

感覚環境のモノサシをまちづくりにいかす段階には、「みつける」「つなげる」「うごく」の大きく3つがあります。

● みつける

「みつける」は、意識してまちを歩き“まちのいい感じ”を発見する段階です。まず、ひとりひとりが、普段無意識に接してきた暮らしの中の感覚環境に気づくことが大切です。音・かおり・光・ねつに注意を払ってみましょう。さらに、一日の変化・季節の変化・時代の変化など、時間による移ろいも意識しましょう。夕暮れの海辺で、日没とともに潮騒の音、海のおいがより鮮明に感じられるようになるというような、感覚の複合化による相乗効果についても考えてみましょう。日常のちょっとした気づきの積み重ねが、あなたの中の“いい感じ”のモノサシを呼び覚まします。

● つなげる

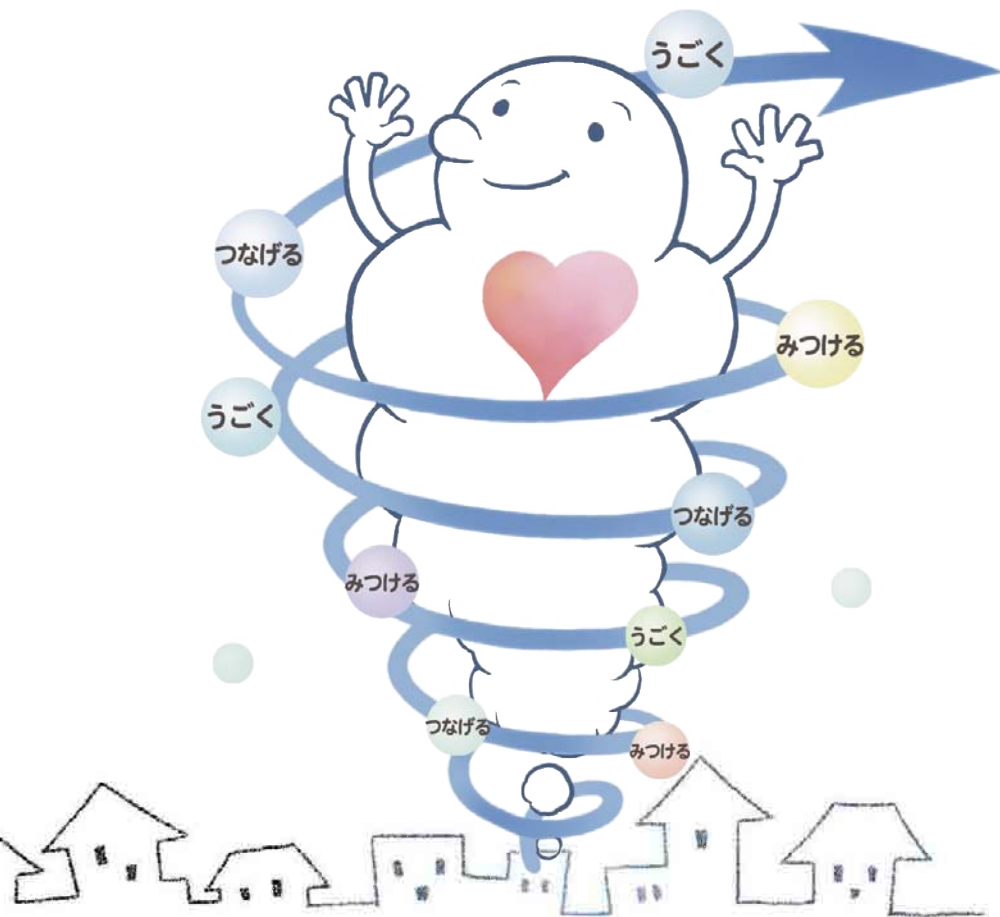
「つなげる」は、みつけてきた感覚環境を、まちのみんなとわかちあう段階です。代々その地域に住んでいる人、最近引越してきた人、通勤している人、来訪してきた人など、同じ感覚刺激であっても人によって感じ方はさまざまです。そうした人々の感覚をつなぎ、共通の“感覚環境のモノサシ”をつくっていきます。すると、“いい感じ”の共感がまちへの思いの共感を生み、まちの



目標を共有することができます。また、その過程で、まちの魅力を再発見することができ、誇りを感じたり、まちに対する愛着を育むことにつながります。

●うごく

「うごく」は、“感覚環境のモノサシ”を使ってみんなで共有した“いい感じ”のまちをこれからも残していくため、また、より良いものにするためにひとりひとりが活動する段階です。“いい感じ”のまちを広めたり、訪れたり、みんなで行きましょう。そして機会を見つけて、また“モノサシ”を使ってまちを見直してみましょう。





第2章 実践編

本章では、「感覚環境」を身近なまちづくりへといかしていくための、具体的な方法について、解説します。

【写真：「かおり風景100選」より】 <http://www.env.go.jp/air/kaori/>

左上上：牧之原・川根路のお茶（静岡県 / 牧之原地区・川根地区）

左中下：東沢バラ公園（山形県 / 村山市）

左中上：鶴橋駅周辺のにぎわい（大阪府 / 大阪市）

左中下：盛岡の南部焼餅（岩手県 / 盛岡市）

右中：輪島の朝市（石川県 / 輪島市）

左下：飛騨高山の朝市と古い町並み（岐阜県高山市）

右下：神田古書店街（東京都 / 千代田区）

みつける

1分間その場所で目を閉じてみましょう。20分、その場に座ってみてもいいでしょう。60分まちの中を歩いてみてください。感覚を研ぎ澄ますと、今まで何気なく歩いていた道が、いつもと違うように感じられませんか。

かおり

● みつけてみよう

「みつける」は、普段の暮らしの中で無意識に接してきた感覚環境に注意を払い、気づく段階です。感覚環境を理解する一番の近道は、実際にまちに出て、様々な感覚を体感することです。

1：感覚のスイッチをオンにする方法

1989年ドイツのアンドレアス・ハイネック博士のアイデアで生まれた「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」はその一例。日常生活のさまざまな環境を織り込んだまっくらな空間を、聴覚や触覚など視覚以外の感覚を使って体験する、ワークショップ形式の展覧会です。

でもその前に、音・かおり・光・ねつといった感覚要素の基本的な特徴を理解し、感覚のスイッチをオンにする方法¹を知っておかなくてはなりません。感覚のスイッチがオフになっていては、せっかく豊かな感覚環境の場面に遭遇しても、気づかず通り過ぎてしまうからです。

感覚について理解できたら、実際にまちに出て、音・かおり・光・ねつなどを意識してみつけてみましょう。その時、まちの中ではそれぞれが関連しあい、しかも時の移ろいの中で刻々と変化していることに注意が必要です。

みつけた感覚は、絵やことばにして記録しておきましょう。これらの情報は、機械で測定した数値情報ではありませんが、あなたの“感覚環境のモノサシ”を使って測った、まちの感覚環境の状態を示す貴重なデータになります。

光

ねつ

複合化



1分間…



20分…



60分…

音

「音環境」とは

せせらぎや樹々のざわめき、風や雨の音、鳥や虫の声、寺の鐘、子ども達の歓声、商店街の賑わいや雑踏・行事の音、交通の音やアナウンス 私たちを取り巻く様々な音は、自然や人間の営み、出来事の結果生じているもので、それらが空間に響き、伝わることによって感受²されています(図1) そのため、音は豊富な情報性を担い、合図や信号としても広く利用されてきました。

また、音はモノやカタチにならないからこそ、人の感性や記憶に強く訴えかけ、「雰囲気」や「気配」なども含めた空間のイメージや印象、質の豊かさを左右しています。³そして音は、一日の時を刻み、季節の移ろいを告げ、時代の移り変わりとともに変化し、時間の移ろいを表します。

さらに音は、感受されることによって、特定の意味や価値を生じる社会的・文化的な意味を持ち、まちの音であればそのまちなしさ、そのまちならではの魅力や特性を象徴しています。また、その地域やまち、暮らしぶり、あるいはその場の状況に応じて、同じような音が好感や愛着をもたれることも、逆に「騒音⁴」として認知されてしまうこともあります。

従来、こうした音環境への取り組みとしては、主に音や音楽による演出や騒音対策⁵が行われてきました。しかし音環境は音のみで成り立っているのではなく、その場の状況に応じ、空間やその場の状況との関係、感受する人間との関係において、様々な意味や価値が生じるものであるため、この「関係性」に着目した取り組みが今後さらに重要となります。

2：感受
外界の刺激や印象を受け入れることです。

3：音による空間把握
いゆる屋内空間だけでなく、鬱蒼とした森に響く野鳥の声から深山幽谷の靈気を、打ち上げ花火の轟きから空の広さを感じるなど、屋外空間においても音は空間の質や豊かさの感受に深く関わっています。

4：騒音
大きな音が騒音とは限らず、一般的には快適と思われる自然音や音楽も、その場の状況にふさわしくなければ騒音と認知される場合があります。

5：騒音対策
代表的なものに、騒音を発生している機械を建屋で覆ったり、機械自体を低騒音化する発生源対策と、騒音源と生活空間の間に防音壁(遮音壁)などの高い障害物を作って、直接伝わる音を遮る伝搬対策があります。



図1：音環境の成り立ち

6：記憶の音

10年以上前から平日には鳴らされていない鐘の音が、依然として「聞こえる」と認識されているまちもあります。実在しない記憶の音であっても過去の音ではなく、現在の音として思っているのが音環境の特徴です。

7：イメージとしての音

「蓮の開花音」のように、人間の聴覚では知覚できない範囲の振動でありながら、明け方の上野の不忍池が黒山の人だかりとなる程話題となり、俳句や文学などの世界で愛でられてきた音もあります。

写真1：伝承の音

練馬しずけさ10選に選ばれた「旧中大グラウンドのもの悲しいトランペットの音」は、戦後間もない頃、夕暮れになると学生がトランペットを練習する音が聞こえた、という地域の伝承に基づいた非実在音の事例です。



● まちづくりにかす「音」

音は、まちのあり方や環境の質、そしてそこで暮らす人々の心を映す鏡とも言えます。したがって、音環境から逆にそのまちの隠れた魅力や特性を浮き彫りにすることができます。一方、騒音問題から地域の課題が明らかになる場合もあります。特に生活騒音の発生には、住民どうしの人間関係が深く関わっており、住民自らがより良い住環境を形成し、まちづくりを担うという意識と過程を通じて、結果的に騒音のない豊かな音環境が形成されることにつながるのです。また、「よい音」というのも、単に聞きやすさや一般的な価値基準では測れず、その地域・まちの文化的・社会的状況にふさわしい音ということになります。

● 音環境を知る、感じる

まちづくりを行うときは、まず音環境がどのような実態にあるのか知り、住み手自身が感じ直すこと、感覚のモノサシで測ることが重要です。手掛かりとして、基調音・信号音・標識音・騒音に分類し、地図に書いてみたりすると全体像をつかむことができます。(表1)この際、聞こえる音ばかりでなく、耳には聞こえない音、また記憶の音⁶や伝承の音(写真1)、イメージとしての音⁷などの非実在音も含めると、より深く音環境を捉え、まちの移り変わりや暮らしの息づかい、人々のまちへの思いなども窺い知ることができます。そして、静けさや静寂といったものもまた、まちにおいては大切なものです。

分類	特性	例
基調音	持続的に聞こえている、音環境の「地」となる音。季節や時代に応じた変化も重要。	車の走行音、機械のモータ音、水路の流水音、潮騒など
信号音	信号、合図としての機能をもち、音環境の「図」となる音。	寺や教会の鐘、チャイム、サイレン、交通機関等におけるサイン音など
標識音	ランドマークに対応する、まちを象徴する音。人々によって特に尊重され、そのまちらしさを担うとみなされる音。	祭りの囃子・掛け声、機織りの音、教会の鐘、湧き水の音など
騒音	音の大きさや音種に関わらず、人々によって「望ましくない」と判断される音。他の音やその環境固有の音をかき消し、聴くことを妨げる音。その環境の社会的・文化的コンテキストにふさわしくない音。	交通騒音、暗騒音、生活騒音、レクリエーション・ノイズ、自然公園における音楽サービス、アオマツムシの声など

表1：音環境理解の手掛かり

● 音の遺産、物語をみつける

とりわけ重要なのはそのまちを象徴し、人々から愛着をもたれている標識音で、後世に伝えていきたいまちのシンボルとしても保全や復興の対象になり得ます。また、「湧き水がぼこぼこ湧き上がる流れに手を浸していると心も洗われ、日々の雑事で忘れかけていた大切な何かが思い起こされた」「夕暮れ時、

お豆腐屋さんの『ぶ~う~』というラッパの調べに、つつがない一日の終わりを感じてほっとする」というように、まちには人の心の琴線に響く音のスポットや暮らしの音があり、こうした音やスポットをまちの「遺産」として評価することが重要です。

さらに「父が寝たきりとなったある日、戸外から聞こえてきた『おかあさん』という少年の呼び声に、幼い頃の自分を思い出したのか一筋涙し、その一週間後に亡くなった」敗戦で疎開先から帰って来たら、一面焼け野原でとても打ちひしがれた。すると風によってニコライ堂の鐘の音が聞こえてきた。その時初めてまたこのまちで一からやり直そう、と生きる気力が湧いた」というように、まちの音は人の「いのち」の源に届き、かけがえのない「物語」を綴っているのです。

こうしたまちに眠っている音の遺産や物語を掘り起こし、共有することによってまちを改めて見直し、その魅力や価値を再発見することにつながります。

● 音の遺産、物語をいかす

よりよい音環境を実現してまちづくりを進めるためには、まず望ましくない音や不要な音・騒音を防止し（マイナスのデザイン）、こうした音の遺産や物語をより豊かに感受できる場や機会を増やすことがポイントとなります。

その際も、新たな音響を導入するというより、印象的に感受できる方法を工夫する（写真2）他、記憶を呼び醒ましたり（写真3）、イメージをかきたてるようなアプローチが望ましく、最終的には音との出会いを通じて、音の背後にあるまちや環境とのつながりを深めることが大事です。



写真3：失われた土地の音の復興

さいたま市の公園「音かおりの里」のボードウォークの高欄に設けた音の俳句。この句をふとよんだ人の心のなかで表笛の音風景が広がり、かつて日本有数の麦の産地だったこの土地への思いを馳せてもらえるよう工夫されています。



写真2：波の音の感受を高める音環境デザイン

福島県いわき市小名浜の埠頭のプロムナードを利用した、波の音を聴く巨大ベンチ《Wave Wave Wave》（庄野泰子作）そぞろ歩く、座る、寄りかかる、寝そべるなどして打ち寄せる波の音をその反響とともに多様に味わうことができます。



● まちを歩いて音を探そう！

使い方

- 1) 対象となる範囲を決めてまちを歩き、聞こえた音をことば（形容詞・擬音語など）や絵・記号で記録します。
- 2) どこから、何から聞こえたか、時代や季節でどう変化するか、まちの中での目印なども考えてみます。
- 3) 音をつつけた場所をマップにおとしたら音マップの完成です。 目隠しして行うとより効果的

私

氏名 _____ 性別 男・女 年齢 ~ 10代・20代・30代・40代・50代・60代・70代~

調査の条件

日時 _____ 年 月 日() : ~ : _____ 季節 _____

天気 快晴 ・ 晴れ ・ くもり ・ 小雨 ・ その他(_____)

寒暑 暑い ・ ちょうどよい ・ 涼しい ・ 寒い _____ 風 風がある ・ 風がない

調査対象となる範囲

調査の記録

場所の番号	どんな音が聞こえた？ ことばや絵・記号で	いつ、どこで 聞こえた？	何から 聞こえた？	音の種類 表1参照	季節や時代での 変化は？	思い出したこと 連想したことは？	我がまちの 目印
例	チャイム キーン・コーン カーン・コーン	平日の昼 下がりに、 散歩道の 途中で	近所の 小学校	信号音	小さい頃から 変わって いない	小学校の給食を 思い出して懐か しくなった	高・ ①・ 中・ 低 高・ 中・ 低 高・ 中・ 低 高・ 中・ 低 高・ 中・ 低 高・ 中・ 低 高・ 中・ 低
1							高・ 中・ 低 高・ 中・ 低 高・ 中・ 低 高・ 中・ 低 高・ 中・ 低
2							高・ 中・ 低 高・ 中・ 低 高・ 中・ 低 高・ 中・ 低 高・ 中・ 低
3							高・ 中・ 低 高・ 中・ 低 高・ 中・ 低 高・ 中・ 低 高・ 中・ 低
4							高・ 中・ 低 高・ 中・ 低 高・ 中・ 低 高・ 中・ 低 高・ 中・ 低
5							高・ 中・ 低 高・ 中・ 低 高・ 中・ 低 高・ 中・ 低 高・ 中・ 低
6							高・ 中・ 低 高・ 中・ 低 高・ 中・ 低 高・ 中・ 低 高・ 中・ 低

音マップ

ベースとなるまちのマップを貼り付け、みつけた音の番号を記録

「かおり環境」とは

パン屋から流れてくる、焼きたてのパンのかおり。花屋には花や葉のにおいやかおりがあり、薬局の前を通れば、独特の薬のにおい 私たちが嗅ぐかおりやにおいをもたらす分子は、約40万種類あると言われています。人間の鼻の鼻腔の天井部分には嗅上皮¹と呼ばれる器官があり、そこにある受容体²でこれを嗅ぎ分け、情報をまとめ脳に送り、具体的なにおいとして認識しているとされています。(図1)

人はいかに敏感である一方で、馴れやすいという特徴があり、同じ環境にいと数分で感じなくなります。でも、清浄な空気を吸うことですぐに回復します。また、空気の流れにより強さが変化したり、ほのかな香水のかおりは心地よいのに、強すぎるといやなにおいを感じるというように、強さによって快不快が変わるといふ特徴もあります。

あるにおいを嗅いで、過去の記憶がありありと甦ってくることがあります。また、育った環境や文化の違い、経験の違い³によって、同じにおいに対しても好き嫌いが出たりします。これは嗅覚に関わる脳の領域が、記憶や感情的な反応に関わりを持つからともいわれています。このように、においは不確かな存在ですが、不確かだからこそ私たちの豊かなイマジネーション(想像力)を呼び起こしてくれるものといえます。

これまで、まちにおけるにおい環境への取り組みとしては、臭気対策など不快なにおいへの対策が中心でしたが、香水やアロマセラピーなど室内でのかおりの演出と同じように、自然や地域の文化・歴史等に関わるまちの心地よいかおりを、積極的に活用しようという試みも各地ではじまっています。

1：嗅上皮

5cm²ほどの粘液におおわれた器官で、5千万個の嗅細胞が並んでいます。その先端にある繊毛という部分に、受容体が並んでいます。

2：受容体

びったりでなくても、構造が似ているにおい分子がはまる、ゆるやかな対応関係になっています。このため、300～1,000種類しかないセンサーで、40万種のおい分子を嗅ぎ分けることができます。

3：育った環境による感じ方の違い

かおりやにおいは、生まれ育った環境や脳の記憶によって、快・不快を判断しています。しかし、最近の清潔志向や無臭傾向から、過度に自分の口臭や体臭を気にする人が増えています。

かおり

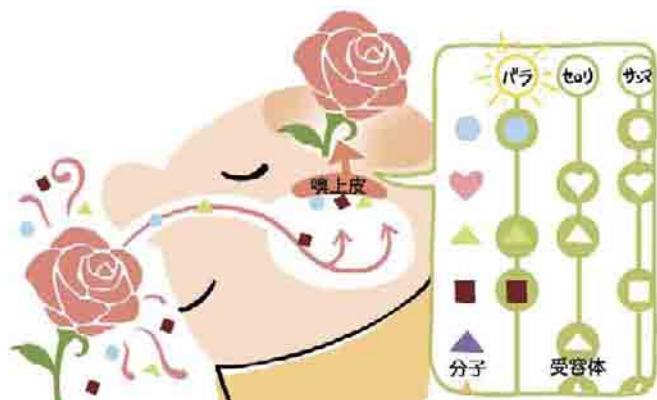


図1：かおりを感じるしくみ

● まちづくりにかす「かおり」

まちに馴染んだ独特のにおいはそのまちの個性です。人の「体臭」と同じように、まちにはそのまち特有の「まちのかおり」があります。いろいろなかおりが組み合わさり、そのまち独特のかおりとなります。人々が身の回りのにおい・かおりに気づき、まちのかおりをいかす気持ちを共有することは、悪臭の未然防止につながります。さらに、生活の質の向上を目指し、安心して、安全に暮らせるまちづくりに、心地よいかおりが加わることで、まちの魅力を一層引き立てることができます。

● まちのかおり・自然のかおり

商店街では、多種多様なにおいが混沌としており、行き交う人々の動きによって、また自分が移動することによっても、においがさまざまに変化するのを感じ取ることができます。鮮魚店、肉屋、蕎麦屋、ケーキ屋、駄菓子屋などはその場所に近くなるにつれ、においも強くなり、また通り過ぎると別のにおいにかき消されてしまいますが、それぞれがその「まちのかおり」をつくっています。工場の多いまちでは、作業の音とともに溶接のにおいが時折するかもしれませんが。お寺の多いまちでは、朝からもしかすとお堂からかすかに聞き取れる読経とともに線香のかおりがするかもしれません。

まちのかおりは人間活動の副産物が多いようですが、自然も大切な役を担っています。川は、山からのすがすがしい空気やかすかに海のかおりを運んでくれます。山は、木々のフィトンチッド⁴をもたらし、土や落ち葉のにおいも心を落ち着かせてくれます。そして、樹木や草花はその時々で自分を主張するかのようなさまざまなかおりを放ち、私たち人間を楽しませてくれます。



4：フィトンチッド

ロシア語で、フィトン「植物」、チッド「他の生物を殺す能力を有する」の意味で、植物から発散される強い殺菌性のある揮発性物質のことです。その一つにすがすがしい森林の香りがあります。森の中で散策や休息しながらフィトンチッドを嗅ぐことにより、神経をやわらげ、健やかな心身を得ることを森林浴といわれます。



写真1：まちのかおり（寺町の線香）



写真2：自然のかおり（梅の花）

● かおりでまちの魅力を生みだす

一般の人々が、視覚や聴覚にくらべ、かおりやにおいの認識レベルが低いのは、嗅覚に関する訓練を受けていないことが原因です。小学校では絵を描い

たり、歌を歌ったりしますが、かおりを扱う教科はありません。⁵そのため、かおりやにおいに対する感覚を磨き、感覚環境のモノサシを使うことからはじめなくてはなりません。まず、嗅覚のスイッチをオンにしているという意識でかおりに触れ、感じとったことを自分の言葉で表現します。「甘い」と感じたら、何に似て甘いのか、その甘さから何を思い出すのか、上手に表現してください。

また、かおりやにおいは記憶や感情と深い関わりをもつため、まちの記憶や歴史を辿り、まちへの思いを深める地域おこしの材料にもなります。(写真3.4) さらに、かおりやにおいは、一瞬にして人を引きつけるという特徴もあります。考え事をしていても、鰻屋から漂う香ばしいかおりで、急にお腹が減ってしまったり... このような特徴は、人々の注意や意識をまちに向けさせる仕掛けとして活用することもできるでしょう。



静岡県伊東市の「黒文字」

温暖で霧が多く、かおりの良い黒文字が自生する地域。明治時代から昭和40年頃まで盛んだった精油づくりを、地域性・伝統性の面から、旅館オーナーが復活させました。



北海道・下川町の「HOKKAIDO MOMI」

まちの森林組合が、間伐枝の葉による精油づくりを事業化。現在はNPO法人として、ソフト事業へも展開し、まちの魅力づくりや雇用促進など、森とともに育っていくまちづくりをすすめています。

5:「香育」の試み

自然環境や植物との接触が減少している現代子どもたちに、自然の香りを楽しむという感覚的経験を提供することを目的に、その試みがはじまっています。

かおり

写真3：かおりで地域おこし

地域に自生する樹木は、長い歴史の中で、地域の産業や文化と深いかわりをもっています。また、それらが放つかおりは、地域の歴史や風土を伝えるだけでなく、人々の記憶や感情に直接訴えかけながら、地域おこしに役かっています。



スイトビー



かりん



写真4：かおりの絵手紙

それぞれ、左はモチーフの色や形を描いたもの。右はモチーフのかおりを描いた絵手紙です。資料提供:宮城県大崎市「感覚ミュージアム」



ひもの



みかん



● まちを歩いてかおりを探そう！

使い方

- 1) 対象となる範囲を決めてまちを歩き、色々なかおりを嗅いで、イメージを自分のことばで記録します。
- 2) 色や音に例えて表現したり、思い出したり連想したりしたこと、好きか嫌いかなども記録します。
- 3) かおりをみつけた場所をマップにおとせば、まちのかおりマップができていきます。

私

氏名 _____ 性別 男・女 年齢 ~ 10代・20代・30代・40代・50代・60代・70代~

日時 _____ 年 月 日() : _____ : _____ 季節 _____

天気 快晴 ・ 晴れ ・ くもり ・ 小雨 ・ その他(_____)

寒暑 暑い ・ ちょうどよい ・ 涼しい ・ 寒い 風 風がある ・ 風がない

調査対象となる範囲

調査の記録

場所の番号	どうかおりがしましたか？	何からかおりがしましたか？	思い出したこと・連想したことは？ 色・音・味・手触りなどでも表現してみよう	このかおりは好きですか？
例	夏みかんの花の甘いかおり	お隣の庭の夏みかんの木	甘い、とても濃厚。白い小さな花と大きな黄色いみかんを連想した。子どもの頃に、アゲハを育てたことがあったことを思い出した。	好き・嫌い
1				好き・嫌い
2				好き・嫌い
3				好き・嫌い
4				好き・嫌い
5				好き・嫌い
6				好き・嫌い

かおりマップ

ベースとなるまちのマップを貼り付け、みつけたかおりの番号を記録

かおり

「光環境」とは

夕暮れの窓明りとイルミネーション、夜空に輝く月や星、ゆれるロウソクの炎とホタルの光、青空に架かる虹と水面のきらめき、真夏の強い日射しと黒い影 私たちが普段「光」と呼んでいるのは、可視光線¹という目に見える光です。一般に、人間は外界から得る情報の多くを視覚に頼っていると

言われています。人間がものを見るためには光が必要です。光は視環境の源泉であり、感覚環境には重要な要素です。

また、光はものの見え方を大きく左右します。平面、立体、空間、環境の姿形は、光の操作によって様々に変化しますから、光の扱いに成功すれば、素晴らしい快適で美しい景色を手に入れることができますし、逆に失敗すると、不適切な環境にもなります。

光環境に関わる大切な要素は、光の量（照度²、輝度³）、光の色（色温度）、色の再現性（演色性）、均斉度（光と陰影）、光源の位置、時間の変化などがあります。特に光の量については注意が必要です。これまで照度という入射する光の量を重視しすぎていたために、物体にあたり反射する光の量（輝度）による環境設計がおろそかになっていました。感じる環境においてはこの輝度設計が最大のテーマで、感じる明るさや暗さの演出が重要なポイントです。

- 1：可視光線
人間が光として感じる可視光線の波長は380～780nm（ナノメートル：1nm=1/10億m）とごく狭い範囲です。
- 2：照度
「自然光や人口照明で照らされた場所の明るさ」のことです。照度計で計測することができます。
- 3：輝度
「光源自体の明るさや照らされた面などの明るさ加減」のことです。

光

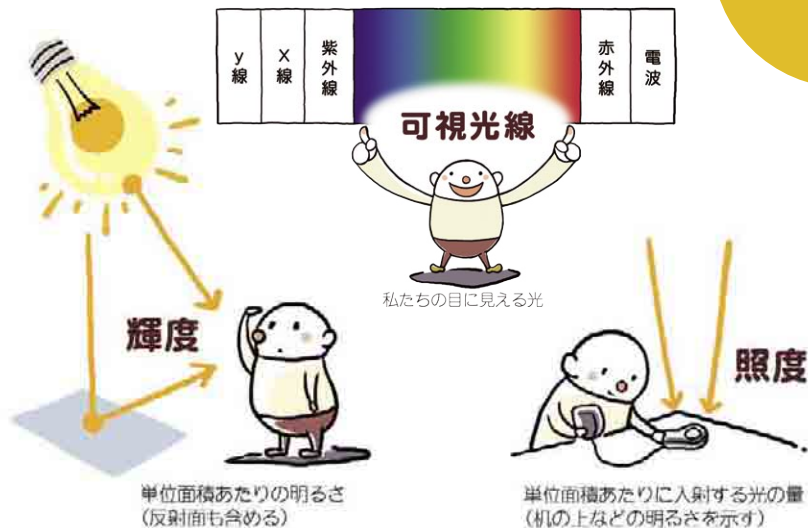


図1：光に関わる大切な要素



写真1：地球の夜景

宇宙から地球の夜景を撮影すると、電気の明かりでくっきりと縁取られた日本列島が写ります。光の無駄使いをやめることは、CO₂削減、地球温暖化対策にもつながります。

光

● まちづくりにかす「光」

まちづくりで大切な光の設計要素は「光害をなくし快適な光でまちを満たす」ということです。まちづくりを行うためには、市民や行政、企業などの関係者の総意を積み上げていくことが不可欠なので、まず、不快な光や快適な光について明確に学習し共有しなければなりません。20世紀、私たち日本人は光を多用し、まちを明るくすることを優先し、白い色の光ばかりを求め、環境から陰影を無くし、時間を固定するような景色を作ってきたと言われていました。すなわち、蛍光灯や水銀灯による白い夜をつくり、路上や公園でも翳（かげ）りなく均一に照明することが良いことだとされてきました。防犯対策などの観点も充分考慮する必要がありますが、「人間に快適で地球環境にとっても正しい選択なのか」ということを再度問い直してみる必要もあります。良い光環境とはどのように設計されるべきなのか。これからの感覚環境のまちづくりの中で、光をどのように考えていったら良いのでしょうか。

● 量から質に転換する

まず、地球環境を保護する立場に立つと、突然電力を手に入れた20世紀の、光の量に頼ったまちを再検討する必要があります。現代人の光の無駄使いを反省し、夜を昼に近づけるのはやめ、わずかな光の量でも十分に快適で美しい、居心地の良さを感じるまちを求めていくことが大事です。私たちの感覚に訴える環境は、量から質への意識の転換によって生み出されるのです。

● 自然の光に学ぶ

全ての良い光の要素は、自然の光の中に学ぶことができます。自然光とは太陽光と灯火（ともしび）そしてこれらが見せる自然の情景の全てです。私たちは、朝日から夕日に至るまでの太陽光の様々な表情に心打たれ、なぐさめられて生きています。焚き火やロウソクの炎には何億年も前からの暖かさを感じることができます。宇宙の彼方からの星明りやホテルのあかりにも、良い光の原点を知ることができます。新しい光源を駆使する時代を迎えて、私たちは自然の光に学ぶことを怠ってはなりません。

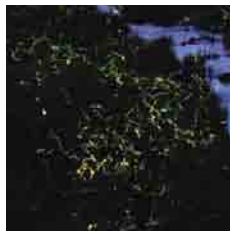


写真4：まちの個性を表現する

光の価値や快適性はそれぞれの歴史、人々、地形、気候、風土、文化などによって様々です。

沖縄県・石垣市の「南の島星まつり」
旧暦の七夕近辺の夜、全島一斉のライトダウンで、美しい夜空を楽しむイベントを開催しています。まちの人々がライトダウンに協力し、自然そのものの、星降る夜を生み出します。



●まちの個性を表現する

光のまちづくりに欠くことのできない要素が、まちの個性を表現することです。画一的な技術が広範囲に利用されている昨今、どこでも同じように光を扱ってきたため、まちの個性が失われつつあります。光の価値や快適性はそれぞれのまちの歴史、人々、地形、気候、風土、文化などによって千差万別です。赤道直下のまちと緯度の高いところに位置するまちとでは、光の個性も全く異なるはずでしょう。光で“いい感じ”をつくること、それはまちの個性を光で表現することです。



なら燈花会

夏の10日間、古都奈良がやわらかいろうそくの灯りで浮かび上がります。1万本のろうそくの灯りが、奈良のまちにとけ込み、人々に感動を与えています。



● 光のシーンを観察しよう！

使い方

- 1) 調査対象となる範囲を決めます。(例： 公園、 駅周辺、 通り、 私の通学路 など)
- 2) シーン (例： 象徴的な場所、 ごく普通の場所 など) 調査テーマを設定します。
- 3) シーン毎に光の様子を記録し、写真やスケッチを添えます。 記憶の光で行う場合は感じたこと

私

氏名 _____ 性別 男・女 年齢 ~ 10代・20代・30代・40代・50代・60代・70代~

調査の条件

日時 _____ 年 月 日() : ~ : _____ 季節 _____

天気 快晴 ・ 晴れ ・ くもり ・ 小雨 ・ その他(_____)

寒暑 暑い ・ ちょうどよい ・ 涼しい ・ 寒い 風 風がある ・ 風がない

調査対象となる範囲 _____

調査の記録

調査テーマ (例： 緑濃い散策路と水辺をもつ公園の光と陰の効果を探る)

光

シーン	光の様子	写真・スケッチ
例	<p>どのような光(または陰)</p> <p>例) 木漏れ日</p> <p>概要</p> <p>例) 強い太陽の光を木々の葉が仰え、風による揺らぎが涼しさを提供する</p> <p>ことばで形容すると</p> <p>例) さらさらとうつろいで</p>	
1	<p>どのような光(または陰)</p> <p>概要</p> <p>ことばで形容すると</p>	
2	<p>どのような光(または陰)</p> <p>概要</p> <p>ことばで形容すると</p>	

「ねつ環境」とは

真夏の照りつける日射し、閉めきった部屋の蒸し暑さ、木陰や川辺の涼しさ、冬の冷たく乾いた北風や縁側の日だまり 私たちを取り巻くねつ環境の快適さは、温度だけではなく、湿度、風、放射が影響します。

同じ気温であっても、湿度が低ければ快適に感じられます。クーラーの設定温度を上げて、除湿機を同時に使って湿度を下げてやると、涼しさは保つことができます。

また、扇風機を使って風を浴びると、クーラーを使わなくても涼しく感じることができます。しかも、風を強くすればするほど涼しく感じられます。

最後は放射です。物体はその温度に従って、電磁波の形で熱を放射しています。これを受けることを放射による熱伝達といいます。夏の日中、道路のアスファルト面の温度は50～60にも達します。アスファルト面に手をかざすとじりじりと焼かれるような感じがします。これが放射熱です。太陽の陽射しを浴びて温度が高くなった道路や壁に囲まれていると、気温があまり高くないでも暑く感じるのです。逆に、屋外を歩いていて木陰に入ったときに、急に涼しく感じるがありますが、これは気温が同じでも放射を受ける量が減るためです。

気温、湿度、風速、放射の4つに加えて、着衣の量は、涼しい、暑いに大きく関係します。また、暑いと感じるときには、薄着にすればいいのです。みんな薄着になって、涼しく感じようというのがクールビズ¹です。4つの要素と着衣の量を工夫することで、快適に過ごすことができます。

1：クールビズ

COOL BIZ 環境省が提唱する、夏のビジネス用軽装の愛称。職場の冷房を28度に保った状態で、涼しく格好良く働ける服装をさします。ネクタイなし上着なしのスタイルなど。



図1：放射のイメージ

ねつ

● まちづくりにいかす「ねつ」

2：ヒートアイランド

都心部の気温が郊外部と比べて特に高くなる現象。草地や森林などが減り、地面のアスファルトやコンクリートが太陽の光を浴びて蓄熱したり、車やエアコンの室外機などから排出される熱い空気でもちが過剰に暖められるのがその原因です。

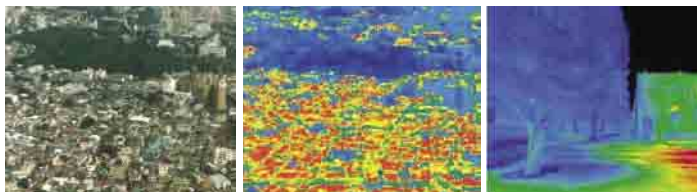
近年、都心でヒートアイランド²といわれる環境問題が生じています。これは、都心部の気温が郊外部と比べて特に高くなる現象です。ヒートアイランド現象が生じる主な原因は、都心部の地面がアスファルトに覆われていること、クーラーの室外機などから熱い空気が排出されていることです。

市街地では、草地や森林などの自然が減っていて、ビルや道路に覆われています。ビルの壁面や道路は太陽光を浴びると蓄熱して表面の温度が高くなり、熱くなった表面はすぐ近くの空気を暖めます。これがヒートアイランドを引き起こします。(図1)また、ビルのクーラーの室外機からは室内を冷やした分の熱が排出されていますし、自動車のエンジンなどからも熱が排出されています。これらも都市の空気を暖めていることも問題です。

ヒートアイランドを引き起こさないように、植物を植えて地面をなるべく自然な状態にしたり、クーラーをなるべく使わないようにして、都市を暖めないようにしていく必要があります。それでは、熱くなった都市でどのようにしたら快適に過ごせるでしょうか。

図1：夏の昼の熱画像

1990年7月28日12:00
奥のまとまった緑は護国寺の森で、手前は木造の建物が密集した地域。建物の屋根が最も高温になります。護国寺の森の温度は気温とほぼ等しく、木造建物の屋根と比べると20度も低くなっています。(写真左・中央)これは、樹木が木陰や蒸散作用により、地表面の温度が上がるのを防いでいるためです。(写真右)
資料提供：東京工業大学・梅干野晃教授



ねつ

● 風や緑をいかす

都市に風を取り込めば、それだけ涼しく感じられます。一般的に風は、昼は海から陸へ、夜は陸から海へと吹きます。また、風は川や水田など、平らなところの方がよく吹きます。どこを風が吹いているかをよく知り、その風を弱めることなく都市の中に取り込むことが重要です。(写真1)そのときには、風で運ばれる空気の温度を上げないように、緑で地面を覆っていくと一層快適になります。また、樹木を植えて木陰をたくさん作れば、快適にまちの中を歩けます。樹木や芝生は、地中から水を吸い上げて葉っぱで蒸発させているので、陽射しを浴びても表面の温度があまり上がりません。また樹木は、道路のアスファルト面やビルの壁に陽射しが直接当たるのを防いでくれますから、ヒートアイランドを緩和する役割もあります。



写真1：都市に風を取り込む河川

韓国のソウルで行われた河川の復元事業です。都市の再開発事業という位置づけで、清溪川（チョンゲチョン）に架かっていた高架道路を廃止しました。道路という人工排熱源が、都市に冷気を取り込む、緑と水の空間として生まれ変わりました。

資料提供：独立行政法人国立環境研究所・一ノ瀬俊明氏

● 打ち水

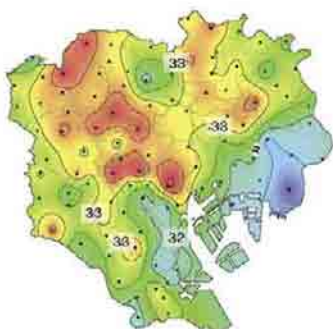
水は蒸発するときに周囲から熱を奪います。ですから身の回りに水をたくさんまいておけば、それだけ熱が奪われます。これが打ち水です。打ち水によって身の回りの物体の表面温度を低く保つことができますし、空気を冷やすことができます。特に夕方に打ち水をすると、空気が冷えてひんやりとした冷たい風を感じることができます。

● ねつからまちの文化を見直す

上州のからっ風や東北のやませ、京の底冷えや丹波霧など、その地域特有のねつ環境（気候・風土）を表す言葉が、地域の個性として全国に知られています。また、厳しいねつ環境が忍耐強い住民気質を育んだり、食べ物の好みに影響したりしています。さらに、寒さが厳しく乾燥した地域では干し柿や葛、温暖な地域では柑橘類といったように、独特のねつ環境から地域の特産品が生まれました。暑い夏には庭に水を打ち冷たいそうめんを食べ、寒い冬にはこたつで鍋を囲みます。そもそも日本には四季があり、さらに、多様なねつ環境を有する細長い国土は、多様な郷土の文化を育きました。クーラーや暖房器具の発達が著しい現代、まちのねつ環境を感覚環境のモノサシを使って再認識し、四季折々の衣・食・住の文化を、改めて見直してみることも、これからのまちづくりに必要です。

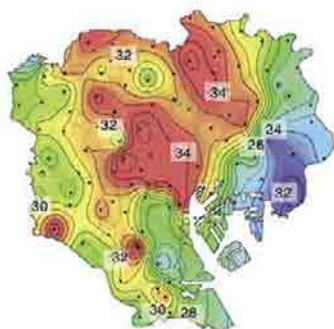


ねつ



日最高気温平均値（℃）

集計期間：2002年7月20日～9月30日



30℃以上の時間割合（％）

集計期間：2002年7月20日～9月30日

図2：ヒートアイランドを見る

都市のヒートアイランド現象について考える場合、「日最高気温の平均値」よりも、過酷な熱環境にどれだけさらされたかを示す「30度を超えた時間の割合」といった情報の方が、人間の感覚環境のモノサシにより近い評価をすることができます。

出典：東京都環境科学研究所年報 2003



●いろいろな場所のねつをくらべよう！

使い方

- 1) 調査対象となる範囲を決めます。(例：公園、駅周辺、通り、私の通学路 など)
- 2) 場所をいくつか設定し、ねつの様子を観察します。(例：道路・芝生・木陰・建物の隙間 など)
- 3) 働きかけによる変化を観察したら、場所毎の違いを比較します。(例：少し歩く、傘を差す、水をまく など)

私

氏名 _____ 性別 男・女 年齢 ~ 10代・20代・30代・40代・50代・60代・70代~

調査の条件

日時 _____ 年 月 日() : ~ : _____ 季節 _____

天気 快晴・晴れ・くもり・小雨・その他() _____

寒暑 暑い・ちょうどよい・涼しい・寒い 風 風がある・風がない

調査対象となる範囲 _____

調査の記録

場所	マップ番号	例	1	2
	場所の説明	河川敷のアスファルトのサイクリングコース		
体感	どう感じる？	暑い やや暑い ちょうどよい やや寒い 寒い 	暑い やや暑い ちょうどよい やや寒い 寒い 	暑い やや暑い ちょうどよい やや寒い 寒い
	どうして？	雲一つ無い良い天気 日陰がどこにもない アスファルトが熱い		
気温	地上 1.5 m	3 2. 1		
	地上 2 cm	3 6. 2		
風	風の強さ	強い やや強い 弱い しく弱い 無風 	強い やや強い 弱い しく弱い 無風 	強い やや強い 弱い しく弱い 無風
	どこから？ 方角・風上の様子	川から少し涼しい風が 吹いてくる		
放射	日射し	日向・半日陰・日陰	日向・半日陰・日陰	日向・半日陰・日陰
	地面や周りの ものの温度は？ 触れて確かめよう	アスファルトが触って いられないほど熱い		
変化	働きかけ の内容	アスファルトでなく、 横の草地を歩いてみた		
	感じた変化	地面からくる暑さが無 くなり涼しく感じた		

ねつ

「感覚の複合化」とは

滝の眺めには、その水の流れ落ちる音・ほとばしる水しぶき・その場全体に満ちる湿り気を感じます。小川のせせらぎには、水のささやき・木漏れ日で光る川面があり、浜辺や海岸に打ち寄せる波の光景には、潮騒や潮風がつきものです。公園の木陰には、木々の形姿や色・枝や葉の奏でる音・適度にもたらされる風があります。商店街は、食べ物などのにおいやさまざまな音なしでは楽しくありません。このような感覚の複合“ワザ”から、心地よさが生まれます。

また、夏に公園で噴水を見れば、たとえそこからはなれていても、涼しそうだという印象をもつことがあります。つまり、ある感覚（噴水を見る）をきっかけに他の感覚（涼しさ）をイメージしているのです。（写真1）風鈴の音が涼しく聞こえたり、公園の木々の揺らめきに風の涼しさを感じるのも同じことです。また、遠くに鐘の音を聞けば、境内の風情やお香のにおいを思い浮かべるかも知れません。

さらにおもしろいことに、例えば、光のデザインの世界では、つくりたい光の様子を「パツパツ」とか「ポワン」といった音で表現しますし、かおりの世界では「甘い」とか「やわらかい」というような他の感覚と共有することばを使って表現したりします。このようなことから、さまざまな感覚が相互に関わりを持っていることがわかります。

また、楽しいとき落ち込んでいるときなど、自分の気分がちがうと、同じ場所でも“いい感じ”に思えたりそうでなかったりします。

このようなことがあいまって、その場の「居ごち」を生むのです。（図1）



写真1：イメージされる感覚
たとえ噴水からはなれていても、涼しそうだという印象をもちます。

1：知味
人それぞれの知識や経験に依存する意味作用とそれによる環境体験の味わいのこと。



図1：感覚の複合化の例（「名水体験」食文化の風景学 / 小林 享 / 技報堂出版より作成）

複合化

● 「感覚の複合化」をまちづくりにいかす

ここまで、音・かおり・光・ねつについて、ひとつひとつその特徴やまちづくりにいかす方法についてみてきました。しかし、実際のまちでは、それらは関連し合って存在しています。ですから、複合的にとらえ、その良さに気づくセンスを磨かなくてはなりません。

まず、川や池などの身近な親水空間、涼を求め日だまりを楽しむ人々の集う緑地、四季折々の花の名所、日の出や夕暮れを愛でる場所、雨や雪や風や霧が映える場所など“いい感じ”と思う場所をみつけましょう。“いい感じ”と思った場所は、感覚の複合化が成功している場所ですから、まずそれをじっくり味わうことです。さらに、“いい感じ”を構成しているものは何か、また音・かおり・光・ねつがどのように関連し合っているのか、いろいろな角度から探っていくとよいでしょう。

● 情景として切り取る

雪の夜 雪明かりに浮かぶ
まちは、しんと静まり返りかえっています。冷たい空気を胸に吸い込むと、独特の雪のかおりがします。いつもと違った特別な情景に、はっと、させられます。

あるいは、夕暮れ時 茜色
の空と長く伸びる影、家々から湯気とともに立ち上る料理やシャボンの香り、包丁のリズミカルな音、豆腐売りのラッパ、子どもたちのさよならの声、平和であたたかな、日常に深く安堵します。

また、松尾芭蕉は「閑さや岩にしみ入蝉の声」「梅が香にのつと日の出る山路哉」と詠い、複合的な感覚を「俳句」で情景として切り取りました。



● 時間の変化を与える

神社の境内 うっそうとした
た社は、ひんやりとした木々のかおりに満たされ、砂利を踏みしめる音が響き、足の裏からその感触が伝わります。しかしその空間は、祭りともなると一転、たいまつ
の炎が夜空を照らし、歓声と熱気に



包まれます。

あるいは、満開の桜 朝、澄んだ空気に、かすかな桜のかわりと小鳥の声、昼は賑やかな子どもたちの声と、暖かな風が運ぶ草花のかわり、夜は提灯に照らされた花々の下、人々の笑い声とごちそうのかわり、同じ場所でも、時間の変化で感覚環境は移ろいます。

●相乗効果をとらえる

山の朝 すがすがしい空気と、森のざわめきに緑のかわり、小鳥たちの声。山の朝は心がぴりりと引き締まります。

あるいは、焼き芋屋さんからだようかわり。夏よりも寒い秋冬の方がおいしそうに感じます。また、昼間よりも夕暮れの方がそれらしく、さらに、哀愁漂う「やきいも～」の聲があれば、いっそう魅力的に感じられます。



●組み合わせをしつらえる

木陰や水際が結びつくと、体感温度や湿り気や樹木のかわりなどが合わさり、厚みある心地よさを生みます。

あるいは、こみ入った都市の一角を囲い、暖かさを取り込むアトリウムやサンルームの日だまりは、野原の日なたぼっこと同じくらい気持ちのよいものです。



このような形で“いい感じ”と思う場所を見つけたり、作りだしていくことは、自分の住むまちに、朝昼夕夜、春夏秋冬、種々の天候を問わず、感覚で味わい楽しむことができる“いい感じ”の拠点がもたらされるということの意味します。そして、これらがまち全体とどう関わっているのか、時間の経過にともなうどう変化するかを見ておくことは、まちづくりの方向性や目標の設定にもつながります。



● “いい感じ” を調べよう！記録しよう！

使い方

- 1) “いい感じ” の場面（場所・時間）に出会ったら作業開始です。
- 2) “いい感じ” を構成している要素を、いろいろな感覚からを見つけ、シートに記録します。
- 3) 感覚どうしの組み合わせの良さや雰囲気なども書き込み、写真やスケッチを添えます。

私

氏名 _____ 性別 男・女 年齢 ~ 10代・20代・30代・40代・50代・60代・70代~

調査の条件

日時 _____ 年 月 日() : ~ : _____ 季節 _____

天気 快晴 ・ 晴れ ・ くもり ・ 小雨 ・ その他(_____)

寒暑 暑い ・ ちょうどよい ・ 涼しい ・ 寒い 風 風がある ・ 風がない

調査対象となる範囲

調査の記録

“いい感じ” の場面（場所・時間）

“いい感じ” を構成している感覚

音 (耳)	<input type="checkbox"/> チェック	
かおり (鼻)	<input type="checkbox"/> チェック	
光 (目)	<input type="checkbox"/> チェック	
なつ (肌)	<input type="checkbox"/> チェック	
その他	<input type="checkbox"/> チェック	
複合化	<input type="checkbox"/> チェック	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div> <p>組み合わせ・雰囲気、時間による変化など</p> </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>写真・スケッチ</p> </div> </div>

複合化

五感の雨遊

小林 享



雨のもたらす「味わい」を読み解くのはなかなか難しいが、無理を承知で試してみよう。身のまわりから五感への刺激で得られる印象を、私は「五官味（視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚で味わうこと）」と呼んでいる。雨の場合、感官への刺激とは、すなわち 眼で味わう 眺めの雨、耳で味わう 雨の音、肌で味わう 大気の湿感や濡れ、鼻で味わう 大気のおいやものの香り、舌（口）で味わう 雨を眺めながらの飲食などを指すが、これだけで味わいが成立するとは考えない。そこには知的反応が必要である。このように言うど難しく聞こえるが、要は雨と言う事象の有する種々の言語情報などが奏でる意味作用を言う。各人の知識や教養に依存するこちらの方は「知味」と呼んでいる。つまり雨の味わいは「五官味と知味の融合」であると考えたいのである。

ところで、分かりやすい五官味に比べて、雨の知味とはいったい何だろう。それは、雨にまつわる地名、神話、詩歌、文章による描写、絵画、映画などの知的資源である。まさに融合とは、雨の体験場面で五官味に知味を重ねることをいう。そうすれ

ば、その場の心地よさはいやが上にも高まろう。

とは言えこの実践となると、忙しい日常に追われる人には甚だ厳しい。そこで、見慣れた日常景の中に雨の似合う場所の目ぼしをつけておくことをお勧めする。通勤通学や買い物の途中で、雨に似合う花々の美しい競演を見つかるのもよし、また、休日ならば、お気に入りの公園や緑道を、水際で綾なす雨の水輪を楽しみつつそぞろ歩きするのもいい。ひと息つく余裕があるなら、雨宿りをかねてティーショップに立ち寄り、往き来する人々の色とりどりの傘の華を楽しもう。余計なことだが、二階ぐらいのところからやや俯瞰的に眺めた方が美しい。あるいは、雨模様を見計らって高層ビルに出かけるのもお勧めする。雨に煙った上層階に登り浮遊感を楽しむ。しばしの間スカイレストランで雲上人の気分を味わおう。もちろん、雨の総仕上げとして雨上がりの楽しみも見逃せない。香気漲り立ちのぼる大気のおいを味わいしめくくる。

その気になって探せば、さりげない日常にも美しい雨がある。雨が降るだけでは美は生まれぬ。美しいと感じる心、味わうゆとりが必要である。

2 つなげる

今聞こえた小学校のチャイムの音に、あなたは何を感じましたか。今年1年生になったあの子には、どんな風に聞こえたのでしょうか。個人の感覚体験を別の誰かとつなげてみると、ありふれた感覚の中に新しい発見が生まれます。

● つなげてみよう

「つなげる」は、みつけてきた感覚環境をわかちあう段階です。「みつける」で集めた情報を、別の誰かとわかちあい“感覚環境のモノサシ”を共有することです。とはいえ、感覚は本来主観的なものなので、共有のためにはそれなりの方法が必要です。「みつける」で紹介した「発見のためのワークシート」のように、絵やことばなどで情報を整理しておき、人に伝えやすくしておくことも一つの方法です。また、その情報をわかちあうときにも工夫が必要です。

1: ワークショップ

ワークショップとは「グループによる参加体験型の学びや創造の場」のことで、1つのテーマに対して同じ体験を通じて楽しみながら、グループの相互作用の中で相互理解や合意形成を見出していく、双方向的な学びと創造の手法です。

例えば、ワークショップ¹というやり方では、みんなで一緒にまちを歩き、みつけた感覚をシートに記録して持ち帰り、グループで話し合いながら、過去・現在・未来の“いい感じ”のまちについてまとめていきます。

また、ブログやホームページを使って、ひとりひとりがみつけた“いい感じ”を紹介したり、WEB上のマップにみんなで情報を書き込んだり... より多くの人から情報を集め、まとめていくという方法もあります。感覚をテーマにした、景を募集したり、写真や俳句などのコンテストを開くのも面白いですね。いずれにしても、“感覚環境のモノサシ”を共有していくプロセスそのものが、まちに暮らす人々が互いに理解を深め合ったり、埋もれていた地域の魅力を再発見したり、まちの将来目標を描いたりといったことにつながり、ひいてはまちへの愛着を深める機会にもなるでしょう。

● “いい感じ”のまちづくりワークショップ

ここでは、あるまちでのワークショップのプロセスを辿りながら、「つなげる」の具体的な方法を紹介していくことにしましょう。

今回は、次項のような発見のためのワークシートを準備しました。まちの中にいくつかのチェックポイントと、それらを巡るまち歩きのコースを設定します。その際、感覚を研ぎ澄ますためには「静かな場所 賑やかな場所」という順番が望ましいです。

それでは、できるだけ多くの仲間を集めて、ワークシートを片手にまち歩きに出発することにしましょう。

発見のためのワークシート（ワークショップ用）

【使い方】

- ・下のシート180%に拡大し、A4サイズのシートにします。
- ・75mm x 75mm程度の5色の付箋を各数枚ずつ貼り付けます。

感覚環境 発見シート

所屬

お名前

作業の手順

- ①チェックポイントに集合
- ②1分間目を閉じ「音・かおり・ねっ」探し
- ③目を明けた瞬間に「光」探し
- ④みつけた感覚環境をカードに記入
- ⑤チェックポイント毎にカードを集め保存

1 ←チェックポイントの番号

←みつけた感覚要素は、絵や記号、
言葉（文章・擬音語・擬態語）
などで自由に記録します。

○○○ ←記録者名

耳でみつける！

音

鼻でみつける！

か
お
り

肌でみつける！

ね
っ

目でみつける！

光

心でみつける！（雰囲気・複合的感覚）

総
合

“いい感じ”のまちづくりワークショップ

協力：見沼田んぼの「環境資産」を保全・活用・創造する会
前橋工科大学の学生さん

まち歩きマップ

まちの中に、いくつかの特徴的なチェックポイントとそれらを巡るコースを設定し、それらを書き入れた「まち歩きマップ」をつくります。



1 1分間目をとじる

チェックポイントに到着したら、タイムキーパーの合図で1分間のブラインドタイム。目を閉じて耳・鼻・肌に意識を集中させ、音・かおり・ねつなどの感覚環境を丁寧にみつめていきます。1分後の合図で目を開き、その瞬間目に飛び込んできた光も感じましょう。



2 感覚環境をつかまえる

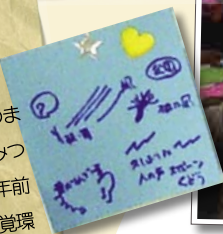
みつけた感覚環境を、ワークシート(前頁)につかまえます。音・かおり・光・ねつの印象を、それぞれの色の付箋に絵やことばで記録します。分類が難しい雰囲気などは、総合の付箋に記入しましょう。また、それぞれの付箋には、チェックポイント番号と記録者の名前も忘れずに。

3 グループでわかちあう

各自でつかまえた感覚環境を、グループで発表しながら、チェックポイント毎のまとめシートに整理していきます。全員が気がついた大きな音もあれば、私だけが気づいた微かなかおりもあるでしょう。感覚環境を題材に、私たちのまちについてたくさん話してみましょう。

4 移ろいを加える

移ろいとは時間の変化のこと。今日のまち歩きやブラインドタイムの瞬間にはみづからなかった、1日前、1年前、数十年前の記憶や伝承、未来への希望の中の感覚環境も書き出します。過去や未来の感覚環境だとわかるように、付箋にシールやマークをつけておきましょう。



まとめのシート ＜チェックポイント用＞

チェックポイント毎に、1枚ずつ用意します。どこで、どんな感覚がみつかったか、「場所」による整理を行うためのシートです。その場所の概要や写真なども添えたら、この段階で写真やコピーで記録を残しておきます。

5 つながりを見つける

各チェックポイントの情報を、今度は別の角度から整理していきます。全てのチェックポイントでみつかった風の音、かならずセットで登場した太陽の光とあたたかさなど、付箋を並べ替えながら、感覚環境どうしとの関係性を見つけ、模造紙の上にまとめていきます。



6 ことばでまとめる

つながりで整理していくと、まちの感覚環境の姿が浮かび上がってきます。そこで、地域の歴史や文化、現況や抱える課題などとも結びつけ、感じたこと・考えたことを、わかりやすくインパクトのあることは、キャッチコピーや俳句などでまとめてみましょう。

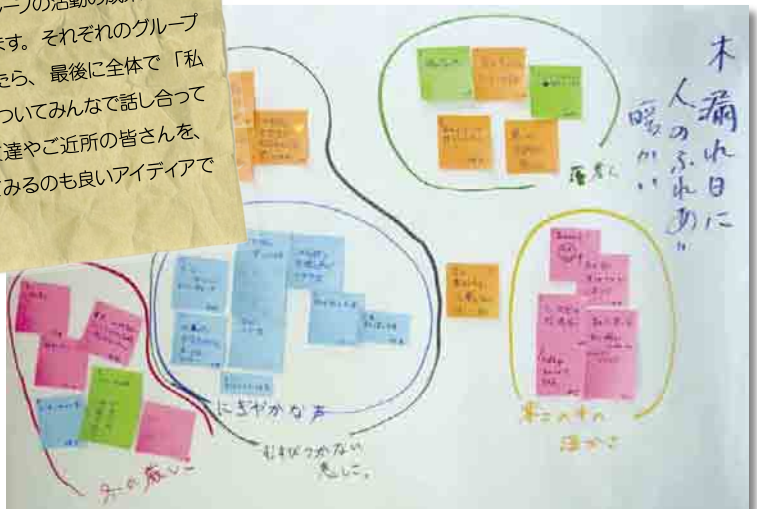


まとめのシート<まち全体用>

まち全体、あるいはチェックポイントを束ねたエリア毎に1枚、シートを用意します。今度は「場所」ではなく、「感覚」に着目した整理を行います。チェックポイント用シートから、特に話が盛り上がった内容や、未来に伝えていきたいものを選びとり、まち全体用のシートの上で再整理します。

7 みんなで発表会

最終的に、グループの活動の成果をお互いに発表し合います。それぞれのグループの発表が終わったら、最後に全体で「私たちのまち」についてみんなで話し合ってみましょう。友達やご近所の皆さんを、発表会に誘ってみるのも良いアイデアです。



3 うごく

まちの“いい感じ”は発見できましたか。みんなで“感覚環境のモノサシ”を共有することができましたか。感覚環境という新たな視点によって、日々過ごしているまちの姿が、今までとは少し違って見えてきたのではないのでしょうか。

● うごいてみよう

「うごく」は、“いい感じ”のまちを伝え、育てていくために、ひとりひとりが活躍する段階です。

それでは、具体的に、何からはじめたらよいのでしょうか。まず“いい感じ”のまちづくりをより多くの人に広めていきましょう。まちの“いい感じ”をご近所や友人に広めたり、ブログやホームページで紹介してもいいでしょう。例えば、「汽笛の丘」「木漏れ日の森」「キンモクセイ通り」など、“いい感じ”のところに名前をつけてみるのもいいかもしれません。ほかの“いい感じ”の場所を訪れて、勉強してみるのも面白いでしょう。みんなと協力して、行政に“いい感じ”のまちづくりを提案できたらすごいですね。

そして、機会をみつけて“感覚環境のモノサシ”を使って、まちを見直してみよう。前にはいいなと思ったところがそうでもなくなっていたり、前には気づけなかったところで、新しく“いい感じ”がうまれているかもしれません。

また、感覚のモノサシ”を共有しておく、まちの目標が描きやすくなります。このように、「みつめる」「つなげる」「うごく」は一度きりではなく、繰り返し続けていき、みんなのお気に入りの“いい感じ”のまちをつくっていきましょう。

とかくまちづくりというと、「見劣りせず」「見栄えがよい」などに目を奪われがちですが、“いい感じ”のまちづくりはそうではありません。ゆっくりとじわじわ効いてくる温泉の効能のようなまちづくりです。それが、場所の居こちや住みごこちへとつながり、来訪者へのもてなしの道具となります。感覚環境のまちづくりとは、穏やかな暮らしをささえるまちづくりです。

◎ 「みつける」「つなげる」「うごく」のすすめかたを考えてみましょう

まちの目標

みつける

いつ？

だれと？

なにを？

つなげる

いつ？

だれと？

なにを？

うごく

いつ？

だれと？

なにを？



それから…

“いい感じ”のまちづくりのヒント

～まちづくりへの導入とデザインを考える～

まちづくりへの導入

まちづくりとはそこに暮らす人々が、より良い暮らしをつくるために、まちが抱える課題に対して、ハード・ソフトの両面から取り組みを進めていくことです。感覚環境を織り込むまちづくりの場面は多分野にわたり、その主体も行政・市民・市民活動団体・事業者などさまざまです。

その中で、“感覚環境のモノサシ”を使って集められた“いい感じ”のまち情報は、各分野のプランづくりのための貴重な資料となります。また、計画・設計・整備を市民参画で検討していく場合には、“感覚環境のモノサシ”が一つの評価の基準となり、主体間の相互理解とまちの目標に対する合意形成を助けます。さらに、整備後の変化を、“感覚環境のモノサシ”によりモニタリングすることで、まちを感覚環境の視点から見守ることができます。そして、なによりも各過程で、時間をかけ積み上げられた地域への愛着や誇りが、“いい感じ”のまちの継承につながります。

行政としては、市民の「みつける」「つなげる」「うごく」のプロセスを、まちづくりの様々な場面で有効に活用し、更に「みつづける」「つなぎつづける」「うごきつづける」ためのしぐみを整えることができます。

取り組みの導入としては、まず人がよく集まる場所に注目し、そうした場所の整備をつなげて行きます。さらにもう少し積極的に踏み込んで、複合的な感覚の拠点をつくり、その場の“いい感じ”を損なう要素を取り除き、そして、いい感じをより豊かに感じられるような工夫をすることが重要です。

感覚環境のデザイン

空間を感覚環境の視点からデザインするにはどうしたらよいでしょうか。空間デザインを進めるにあたっては、ある場所からまち全体へという空間の広がりに関わる側面と、場所の継承という時間の流れに関わる側面に注意が必要です。

たとえば街角に、人々が集える覆いや屋根付きの場所を用意すれば、ある時には日射を防ぎ、またある時には雨宿りをする場になります。人々は日差しを遠ざけ風を引き込み涼しさを楽しむ、濡れを遠ざけ湿り気を引き雨音を楽しむ、という身体感覚で味わうひとときを過ごせます。広場にかおりの樹木を植えて木陰を作れば、放射熱が減るだけでなく、風が吹き、葉の音が暑さを和らげていると感じます。

空間形成における複合化のデザインとは、五感の相乗効果で増幅される、あるいは別の新しい心地良さが生まれてくる、そういうことを期待するデザインです。ですから、その場所がまち全体とどのような関係にあるのか、時間経過にともなうどう変化するのか、という意識を常にもたねばなりません。また、まちを全体的に眺め、しかも長期的な姿勢で取り組むことが大切です。その空間を利用した人々の記憶、また愛着や思い入れといった特別な感情が時間をかけて層を成し、徐々に命がふきこまれます。そして、ある種の趣や雰囲気をもったとき、感覚環境のデザインはようやく完成するのです。

感覚環境をいかせるまちづくりの場面



第3章 事例集

本章では、「感覚環境」を身近なまちづくりへといかした、先進的な事例を紹介します。



屋上緑化や街路樹整備等により地表面被覆の改善、排熱抑制や遮熱、断熱を実現し、ヒートアイランド現象を緩和することにより、まちを涼しくするための事業を展開しています。環境省のクールシティ中枢街区パイロット事業も活用し、二〇〇七年より5年間で10棟以上のビルで屋上緑化が実現する予定です。

ヒートアイランド対策

8月、大丸有が暑くなる時期。参加者約千八百人により打ち水、散水アートが実施されました。温度計を手にした参加者一人ひとりがセンサーとなり、都市の体調をモニタリングしました。打ち水前後の気温の変化を測定し携帯サイトに送信。0.2〜0.6度の気温下降効果がみられました。

散水アートプロジェクト 打ち水プロジェクト



ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン

「ラ・フォル・ジュルネ（熱狂の日）」は従来のクラシック音楽のイメージを覆す、大規模でエキサイティングなクラシックの音楽祭です。一九九五年にフランスで誕生し、二〇〇五年のゴールデンウィーク日本に上陸しました。「ラ・フォル・ジュルネ（熱狂の日）」の名の通り、熱いお祭りムードいっぱいの熱い音楽イベント。期間中、大丸有地区の随所で街角音楽会が開催されクラシックの音に包まれます。



1

千代田区・大丸有地区

だいまるゆう 大丸有千年の計

これからもずっと千年先まで、豊かな環境の中で、人々がいきいきと働き、くらすために、どんな大丸有（大手町・丸の内・有楽町）のまちをつくらなければいけないだろう。まちは、そこで過ごしてきた人々の営みやあしあとを「まちの記憶」として宿しながら、次の時代に受け継がれます。だから、大丸有では、これまでのあゆみを大切にしながら、遠い未来を見すえ、まちのデザインが考えられています。

このようなか、みんなが安心・安全に過ごせる快適なまちをめざし、感覚環境のデザインもまちづくりに取り入れられています。具体的には、道歩く人が涼しく感じられるよう季節の感じられる街路樹を植栽し木陰をつくり、ビルの屋上緑化等を通じてヒートアイランド現象の緩和を図ったり、また、人と地球にやさしい多様な光の世界を展開するイベントが開催されたりしています。さらに、クラシックのフェスティバル「ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン」の期間中には、街角の随所で音楽会が開催され、大丸有のまちが音楽で包まれます。



新丸ビルの10階のエコを創る広場「エコツェリア」は、丸の内エリアの街づくりで培ってきた、様々な環境への取り組みをご紹介します。これからの環境対策をみんなで考え、生み出し ていくためのスペースです。

大手町・丸の内・有楽町地区
再開発計画推進協議会
<http://www.ares.dinejp/tcc/index.html>

光都東京・LIGHTPIA

クリスマス時期、大丸有地区は人と地球にやさしい多様な光に囲まれます。平成19年は「フラワーファンタジア」を実施。花のタワーと絨毯が、昼は自然の花の鮮やかさで大丸有地区を彩り、夜は煌びやかな光と音の演出により幻想的な空間をつくりました。あわせて、自然エネルギーで街の灯をともし企画も進行中です。



2

奈良県

あおによし 奈良の京は 咲く花の
 にほふがごとく 今さかりなり

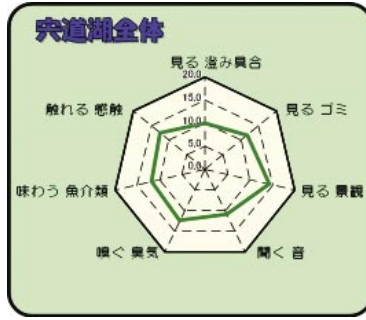
和歌にも歌われた古都奈良の魅力は、絵葉書のような世界だけに留まりません。平成18年、五感で楽しめるいきいきとした魅力を奈良に加えていきたいという趣旨で、「わたしのおすすめ『五感で楽しむ奈良』」が公募され、全国二二〇七件応募の中から一〇八件が選定されました。五感で発見された新たな魅力は、奈良という歴史深いまちにさらなる味わいを加えています。



写真上：臭覚 / なら燈花会のろうそくのにおい
 写真中：聴覚 / 鹿よせのホルンの音（奈良公園）
 写真下左：五感複合 / 原始林を歩く（春日山原始林）
 写真下右：視覚 / 奈良市内夕焼け 写真提供：奈良市観光協会

私のおすすめ「五感で楽しむ奈良」
<http://www.pref.nara.jp/kanko/gokan/108/index.html>

地元の市民モニター・地元中学生・こどもエコクラブが自らの感覚のモノサシを使い、平成16年度から宍道湖・中海周辺の環境（湖水の澄み具合・ゴミ・景観・音・臭気・魚介類・湖水等）を観察しています。科学的データは一般の人々にはわかりにくいのですが、感覚のモノサシを使うことで湖沼の環境を身近に感じることができ、宍道湖・中海への関心が高まりました。



3

島根県

宍道湖・中海の環境を五感でチェックしてみよう!

「五感」ってなに?
 「五感」とは、私たちが感じることでできる次のような感覚のことです。

チェックしたら何がわかるの?
 宍道湖・中海の環境がどういふ状態がわかります。みんなでできるようにするための方法を話し合い、実際に行動してみよう。

わたしたちにできることから始めよう

五感による湖沼環境指標

五感	観察項目	選 択 肢	判断対象の例	点 数
見	湖 水 の 澄 み 合 合	澄んでいる (20点)	水の透明感、色、アオコ、香濁など	10.0 点
		少しにごっている (10点)		
		にごっている (0点)		
見	ゴ ミ	ほとんどない (20点)	水面や湖岸に見当たるゴミなど	11.7 点
		少し見当たる (10点)		
		たくさんある (0点)		
景 観	景 観	美しい心がなごむ 風情がある (10点)	周囲の山並みや建物、朝日・夕日、シジミ魚の風景など	7.1 点
		特に感じることはない (5点)		
		殺風景・見逃しが悪い (0点)		
聞 く	音	こころよく感じる音・静かで落ちつく (10点)	鳥の鳴き声、さざ波の音、近くの寺の鐘の音、船舶の音など	5.3 点
		特に気にならない音 (5点)		
		うるさく感じる音 (0点)		
聞 く	臭 気	こころよい・香り・臭いはない (20点)	潮の香り、木や草花の香り、排気ガスの臭い、煙の臭い、ヘッドロ臭など	12.3 点
		特に気にならない臭い (10点)		
		食べたく感じる (0点)		
味 わ う	魚 介 類	食べてみたい (10点)	シジミやアサリなど宍道湖・中海でとれる魚介類	5.9 点
		どちらでもない (5点)		
		食べてみたいと思わない (0点)		
触 れ る	湖 水 の 感 触	触ってみたい (10点)	手や足を湖水につけてみたいかどうか	6.2 点
		触ることに対し抵抗がある (5点)		
		触りたくない (0点)		
■五感による湖沼環境ランク表				合計
合計点数	ランク	評価内容		58.6
80点以上	A	おおむね良好で親しみやすい環境にあると感じられる		
50点～79点	B	やや気になる面があるが、ますます良好な環境であると感ぜられる		
40点以下	C	快適さに欠け、親しみにくい環境にあると感じられる		

宍道湖・中海周辺の感覚のモノサシで測る

宍道湖・中海の環境を五感でチェックしてみよう!
http://www.pref.shimane.jp/environment/kankyo/kankyo/shinjko_nakaumi/sn_gokan.html

まちづくりに「かおり」の要素を取り込むことで、良質なかおり環境を創出しようとする地域の取組を支援するために、「かおりの樹木・草花」を用いた「みどり香るまちづくり」企画コンテスト（主催環境省）が行われ、平成18年度は「かおりとチヨウの森」づくり、平成19年度は「香りとさえずりの杜」「コミュニティガーデンづくり」が環境大臣賞を受賞しました。



4

松本市・稚内市

みどり香る まちづくり

奈川地区「かおりとチヨウの森」づくり

（長野県松本市・特定非営利活動法人 信州ピオトープの会）

チヨウの好むハギ、アベリア、ブッドレアなどを植えてチヨウを呼び寄せ、飛ぶ姿を観察したり、生きもの情報板を設置したりすることで、子供の環境教育にも役立っているという企画。現在、植樹された木々は開花し、かおりを楽しめるだけでなく、チヨウやいろいろな昆虫が飛び交う空間が創出されています。



みどり香るまちづくり企画コンテスト

http://www.env.go.jp/air/akushu/midori_machi/index.html

稚内市恵北地区「香りとさえずりの杜」
コミュニティガーデンづくり

（稚内市歴史・まち研究会／稚内市恵北・増幌地区まちづくり委員会）

55年間放置されていた土地に、宗谷地区の気候風土にふさわしい「香りの樹木」や「実のなる樹木」を植栽し、野鳥を集め、市民の憩いの場を再生する企画。地域住民を中心に自主管理による地域コミュニティガーデンづくりが行われます。



伝統を伝え、 まちに生きる鐘

平成8年、全国各地で人々が地域のシンボルとして大切にし、将来に残していきたいと願っている音の聞こえる環境（音風景）が広く公募され、音環境を保全する上で特に意義があると認められるものとして、残したい“日本の音風景100選”が選定されました。100選は自然環境だけではなく、文化や地場

産業が形成する音風景も含め、幅広い内容になっています。なかでも、地域の生活文化と深く結びついている鐘の音については全国各地の10風景が選定されました。時を知らせる鐘の音など、日本人の心に今でも響く音は、今でも地域の人々に親しまれ保全されています。



残したい“日本の音風景100選”
<http://www.env.go.jp/air/life/oto/>

写真左上より：

函館/リトス正教会の鐘（北海道/函館市）

善光寺の鐘（長野県/長野市）

寺町寺院群の鐘（石川県/金沢市）

上野のお山の時の鐘（東京都/台東区）



知る区ロードの日 探検隊員たちが、1年に1回、一同に集う日です。発見したことや感じたことを探検報告として書きます。探検報告の用紙はチェックポイントでもらえます。みんなの探検報告は約半年後に、みんなが感じたまち・発見したまちとして「すぎまるマガジン」に編集されます。



6

杉並区

知る区ロードを 歩くと感じる事

東京杉並区の知る区ロードは区内を巡り、感覚で「杉並という土地の感覚」を感じるきつかけづくりのために創られました。コースを巡ると、感覚をテーマにした「オアシス」と呼ばれる体験施設が設置されています。

知る区ロードの特徴は、その施設のユニークさと共にそこを拠点とした活動にあります。活動は、区民が中心になっている「知る区ロード探検隊」がさまざまなプロジェクトを推進しています。例えば、ルートの目印をみんなで作るワークショップ、オアシスのさまざまな装置の設置運営、そして毎年夏休み時期に開催される「知る区ロードの日」には、ルートをみんなで歩き探検地図を作成、参加者との交流イベント等が実施されます。現在、20年を経てそれらの活動は、区民の自主的な運営へと移行が予定されています。区民の感覚環境を運営するチカラがためられようとしています。

東京 杉並区「知る区ロード」
<http://www.suginami-siruku.org/>



はなのオアシス



みみのオアシス



ときのオアシス



はだしのオアシス

橘のかがまちを興す

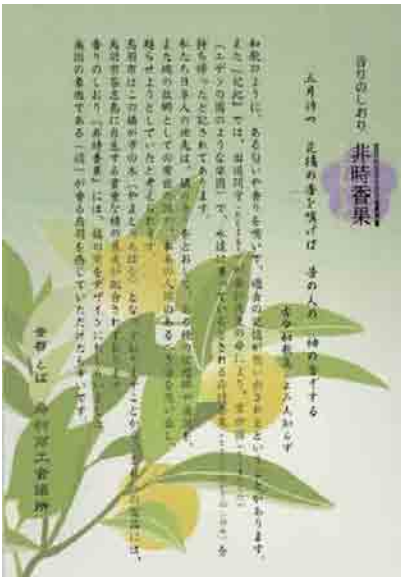
たちはな



橘の木とかおりがかたちになるさまざま

橘は数少ない日本固有のかんきつ類で、そのさわやかなかおりは古代より和歌に歌われ人々に安らぎを与えてきました。鳥羽市の答志島に原木が多く自生し、倭橘（やまとたちはな）は、鳥羽市の木にも指定されています。近年、そのかおりから鳥羽のまちが動いています。市民からの苗

木の提供により、市の木として市民自らが植栽する活動が活発化し、これまでに五千本の橘の木がまちに植えられました。また、商工会議所が中心となり、橘のかおりを活用した商品化が試みられています。秋の実がなるころ、まちに橘のかおりが漂います。





● 感覚環境設計テキスト作成検討会の構成

< 総合 >

座長 小林 享 前橋工科大学 大学院 教授 (工学部 / 工学研究科 / 建設工学専攻)
井上 成 大手町・丸の内・有楽町地区再開発計画推進協議会 (三菱地所株式会社都市計画事業室副室長)

< ねつ >

一ノ瀬 俊明 独立行政法人国立環境研究所主任研究員 (社会環境システム研究領域)
村上 暁信 東京工業大学大学院 講師 (総合理工学研究科 / 環境理工学創造専攻)

< 光 >

面出 薫 (株)ライティング・プランナーズ・アソシエイツ 代表取締役
富田 泰行 (株)トミタ・ライティングデザイン・オフィス 代表

< かおり >

水庭 千鶴子 東京農業大学 講師 (地域環境科学部 / 造園科学科)
吉武 利文 (有)香りのデザイン研究所 所長 (パフュームデザイナー)

< 音 >

田中 直子 宮城学院女子大学 講師
坂本 慎一 東京大学生産技術研究所 准教授

【写真:「残したい日本の音風景 100 選」より】<http://www-gis2.nies.go.jp/oto/>

左上 : 川越の時の鐘 (埼玉県 / 川崎市)
左中上 : 川崎大師の参道 (神奈川県 / 川崎市)
左中下 : 横浜港新年を迎える船の汽笛 (神奈川県 / 横浜市)
左下 : からむし織りのはたき音 (福島県 / 昭和村)
中上 : 水沢駅の南部風鈴 (岩手県 / 奥州市)
中中 : 大平山のおじさい坂の雨蛙 (栃木県 / 栃木市)
中下 : 常光寺境内の河内音頭 (大阪府 / 八尾市)
右上 : 柴又帝釈天界限と矢切の渡し (千葉県 / 松戸市、東京都 / 葛飾区)
右中 : 樋橋の落水 (千葉県 / 香取市)
右下 : 博多祇園山笠の昇き山笠 (福岡県 / 福岡市)

“いい感じ”のまちづくり

感覚環境のモノサシをまちづくりに織り込むために

発行: 環境省 水・大気環境局大気生活環境室

作成: 感覚環境設計テキスト作成検討会

編集・デザイン: (株)タム地域環境研究所 / (株) LAO



環境省 水・大気環境局大気生活環境室

TEL: 03-3581-3351(代)
<http://www.env.go.jp>



國境內 水・大氣環境衛生研究所

TEL: 03-3686-2211

FAX: 03-3686-2211

URL: www.nies.go.jp